

## 楽しいタクシートの運転手さん

大平 忠

「昨日、久しぶりでタクシーに乗った。よく喋る運転手で、20分弱の間退屈しなかった。」

「お客さんは言葉からすると、どちらからで？」

「7年前横浜から」「福岡と比べるとどうです？」「魚が新鮮でうまい、安いしね」

「鳥もいいでしょ、柏飯、焼き鳥もうまい」「博多駅も飛行場も近いし」

「そういう時はタクシーに乗ってくださいよ、近くて安くて済みますから」

「ところで、運転手さんは福岡生まれかい？」。ここから独演が始まった。

生まれは宮崎、福岡へ来て50年、68才、車関係の仕事をやってきたとか。バス、大型車両の免許、重機を動かす資格もあり、車の整備もできる。ところが、今やってるタクシーの運転手が一番性に合っている。前の会社を65才定年で辞めて、タクシーの運転手になったら、やたらに楽しいことが分かった。

「なんでそんなに楽しいのです？」と聞くと、好きな時に働けばいい、きちんと夕方にも帰れる。カミさんだって昼間亭主と顔を合わせないのでホッとするし。

タクシーに乗って2年半ですが、普通は車一台を24時間二人で交代で使うんですけど、こんなこと言ってるんですけど成績が良かったのでこの車を一日任せてくれるようになった。今運転手不足で車が余っているしね。

その代わりに頭も使いますよ。昼休みが盲点、食堂なんかに行かない、車の中でコンビニのおにぎりを食べる、すると無線が入るんですよ。土日、時々中洲なんかの盛り場へ朝の4時とか5時に行くと、結構お客さんがいるんだなあ、ここからは内緒だけど、車のフロントガラスに「予約中」の看板を上げて、お客さんが男の時は通り過ぎて、綺麗どころだと、こうやって（と、やってみせる）看板を外すんです。

「やるなあ、運転手さんは！」「ええ、一生で今が一番楽しいです。なんとたつて孫に小遣いをやるときなんぞ生き甲斐を感じます」

極めつきは、降りる時だった。

「お客さんと喋って楽しかったなあ、有難うございました」

(2023年4月27日・800字)